研究雑話（78）
人間発達の物質的基礎（四二）：結び（二）、自分のリズムで自分のことばを、開放系の原理。

藤井力夫

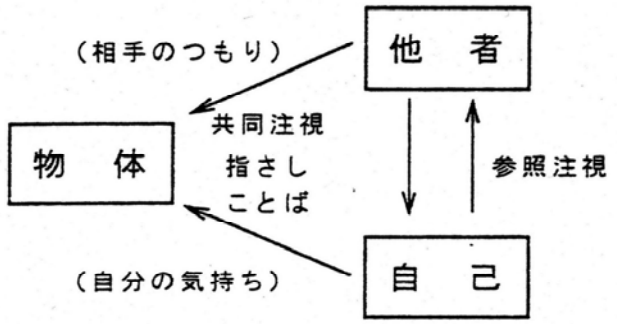
前回は、「知情意」という古来からの問題を脳神経系のまとまりとして、どのように考えるか、「情」を「活動」と置き換えたE．セガンの考えを発展させてお話しました。意志の自由と客観的必然の制限をめぐっての対立と同一の問題です。人間は最初から意志をもっていません。客観的必然についても行為しない限り解けません。活動だけは、それなりにいつも「予期」をともなっていました。未成熟で、保護の必要な二重の意味で弱い存在ですが、この予期に万物の霊長としての発展の方向が内包されていました。たとえ歩みが遅くても、あるいは遅延的な内省であっても、予期が進歩を保障しているのです。それゆえ、予期できる自分のリズム、これを崩さないことが重要です。今回は、このことをめぐって、一歳から二歳にかけての「物を介した他者関係」の成立に立ち戻って、お話したいと思います。

図に、物体を介した自己と他者の関係について図解しました。物体に代表される周りの自然にどのように立ち向かうか、これが予期であり、活動です。注書きしましたが、物を介した他者関係の成立は、同意や要求のための他者への「見返り」にあります。自閉的傾向の強い子どもはこれが苦手です。つぎのような内容を含んでいます。

一つは、大人の見ている方向に、何だろうと目線を向けること（共同注視）。子どもが見ているものに、大人は目線を添えて、「ワンワン」だとか、「ニャンニャン」だとか、反復しやすいように働きかけます。この関係のなかで、物を介した目線の共有が成立します。

大人の見ている方向を共同注視できれば、子どもは指さしします。たとえば犬を見つけて、指さします。子どもは、自ら「ワンワン」と言いますが、子どもの目線は、同意を求めて、大人の方を見返っています（参照的注視）。興味あるものを見つけたのです。つぎの動きが予期できます。鳴き方、等。見つけ、予期したその子のリズムが、同意を求めて、コトバを産み出す。そう言っていいでしょう。行為の方法は、指さしの段階から、実際に触ったり、組み立てたりできるようになるまでいろいろです。行為の内容に応じて、コトバがそれを整理します。それゆえ、自分以外のリズムで強制されたのであれば、行為もないし、コトバによる整理も必要ありません。自分のリズムは、他者との関係で浮き彫りにされます。他者のリズムを自分なりに取り込むとき、工夫や努力がいります。この工夫や努力の自覚こそ、自我形成の基礎です。なぜなら、やりたいことは、兄ちゃんや姉ちゃんがやっていることで、自分ではできないことばかりだからです。（北海道教育大学教授）

相手のリズムに触れて、
自分のリズムを引き出し、
相手のリズムで自分のリズムを作る。



物を介した他者との関係：　三項関係の成立は目線の共有にある。子どもは、大人の見ている方向を、何だろうと見つめたり（共同注視）、見つけた物を指さしながら、同意や要求のために大人を見返ったり（参照的注視）している。こうした同意や要求の見返りは、離乳食やおむつ交換のときに展開される諸関係のなかで準備されるものであろう。即ち、相手のリズムにふれて、自分のリズムを引き出し、相手のリズムで自分のリズムをつくるような諸関係である。膝這い等の移動能力の発展にともなう自分のリズム駆動の方向に関する質的変化が、こうした見返りを生むのである。

自分のコトバで整理する：　同意を求めたり、要求するときには、「マンマ」とか「ブーブ」、「ココ、パパ」といったコトバが発せられる。移動能力の方向性が、見つけた物への期待や要求を高め、拍節リズムを生むのであろう。見つけた物への指さしは、見返りをともなうだけでなく、自分のことばで相手に要求を伝え、自らをも調節することになる。こうして、物を介した他者との関係が、コトバで整理される。この関係の発展が、他者を自らの脳神経系に取り込み、自我を形成することになるのである（雑話45、参照）。